パニック、パニック、パニック

伊藤　聡
人間総合科学研究科講師

人は突然遭遇した驚愕する状況では普段では想像できない反応を示したり、あるいは普段ならすぐに対処できるはずのことに対処できなくなったりするようである。私は2年前に筑波大に赴任したが、前任地の新潟での忘れられない事件3件を紹介する。

1. 鬼子母神の心

新潟港に“南極観測船しらせ”が寄港し一般に公開されることになったので、妻と3歳の娘を連れ、兄の一家と共に見学に行った。長時間並んで待ったあとにようやく乗船すると、そこにはヘリコプターがあり、パイロット用のヘルメットをかぶって写真撮影ができるようになっていた。当時映画のトップガンが流行っていたこともあり、甥っ子とツーショットで写真を撮っていたところ、妻が血相を変えて、“あなた、美紀（娘）はどうしたの？”ととんできた。“えー、そっちが見ていたのでは？”とこちらも真っ青になり、たくさんの人をかきわけ艦内を走り回って探した。“誰かにつれさられたのだろうか？”“周りは海、転落したのだろうか？”私はもうパニック状態である。あとで思いおこしてみると、階段を必死に上り下りして上の階と下の階を行ったり来たり、同じところを何度も探していた。結局自分たちでは見つけられず、係の人に娘を捜していただくようにお願いした。全艦放送で迷子を捜すお願いがアナウンスされ、幸い娘はすぐに発見された。身長が低いので、立ち入り禁止のロープの下をくぐり、甲板にいたのだ。

その時思い出したのが鬼子母神の話である。皆さんご存知であろうか？母の実家がお寺だったので、私が子どもの頃は仏教関係の本をよく読まされた。鬼子母神はインドの神だが、人の子どもをさらっては食べていた。自身には1000人の子があったが、お釈迦様が子どもを食べられた親の心を鬼

子母神にわからせるため、その末っ子をさらって隠した。鬼子母神は狂ったように走りまわり我が子を探したが見つからず、最後にお釈迦様にすがった。そこでお釈迦様は親が子を思う心がいかに尊いかをさとし、末っ子を返した。その後鬼子母神は子どもを守る神となった、というお話である。娘を探して走り回った自分の姿は、あとで思うとまさしく鬼子母神であった。この話には続きがあり、どうしても人の肉の味を忘れられない鬼子母神に、お釈迦様は、ザクロを食べて我慢しなさい、と教えたそうである。子どもの頃、ザクロは人肉の味がする、と誰かに聞いて、非常にグロテスクな食べ物であると思っていたが、実はその話のルーツはお釈迦様であったのである。

我が娘が発見され、涙を流して安堵した私達に向かって、娘は、“美紀、海を見ていたの。”と、文学的な言葉をつぶやいた。

2. ターミネーター登場

新潟の冬は厳しく、春が来た時の喜びはひとしおである。特にバイク乗りにとっては、雪が溶けてエンジンをかけ、愛車にまたがった時の気分は格別である。

ある年の初乗りの時、私は狭い小路をめいっぱいアクセルをふかし爆走していた。すると突然、前を走っていたワゴンがウインカーを出さずに頭を左に振り、次に右の駐車場に入ろうと方向を変えた。結果的に道路を一杯に塞ぎ、私はあわてて急ブレーキをかけたが間に合わない。無意識にバイクを倒して横滑りした。滑っている時間はほんの数秒だったと思うのだが、私の頭の中では、“明日の透析当番は誰がやるのか？”“来月から出張するはずの病院は誰が行くのか？”“入院、治療費はどのくらいかかるのか？”などなど、さまざまな事がその数秒のうちに駆け巡った。人は死ぬ前にそれまでの人生が走馬灯のように頭の中を駆け巡ると言われるが、まさしくその通りであった。バイクが停止し、真っ先に確認したのは、両手、両足がついているか、動くかであった。激痛はあったが、幸い四肢はついていた。立ち上がれるか心配だったが、何とか大丈夫だった。ワゴンの運転手に文句を言いに、片方の足に痛みがあるのを我慢して、ガッチャン、ガッチャン、と跛行しながら近づいて行った。運転手は明らかに動揺しており恐怖が顔にはっきりと表れていた。革ジャンを着た大男がガッチャン、ガッチャン、と近づくシーンはどこかで見たなとあとで思ったら、そう、ターミネーターだった。（よく考えるとターミネーターが足をひきずって近づいてくるのはスケルトンになってからですね）

3. 海で遭難

私の父はいっさい酒を飲まなかったが、その分道楽で 11 人乗りの漁船を持っていた。私も船舶免許を取っていたので、父が他界してからは船長に昇格した。在籍していた新潟大学第二内科では海開きを浜茶屋（新潟では海の家をこう呼ぶ）で行なっていた。私は沖から近づき、研修医数名に手こぎボートで乗船してもらい、クルージングを楽しもうと計画した。船は信濃川の支流に係留していたので、そこから出発した。

ところが信濃川から日本海に出ようとした矢先、エンジンルームから黒い水が流れ出て来た。ドアを空けてみると、黒い煙が充満。エンジンの回転をおとして煙が引くと驚いたことに、ドッドッドッとエンジンルームに大量の海水が流入していた。そして明らかに船は沈みつつあったのである。どんどん吃水が深くなっていく。これは恐怖だった。“信濃川に飛びこまなければならないのか？”という暗い予感が頭をよぎった。気が動転していて、海難救助の118に電話をすべきであることを思いつかず、なんとか係留先に連絡を取り、海上保安庁に救助を要請してもらった。当事者は完全に動揺していたが、乗船していた同僚が冷静に、“エンジンが動いているうちに岸につけよう”と助言してくれ、突堤に船をつけてロープで固定した。バケツでエンジンルームの海水を掻きだしたが、不思議なことにエンジンを切ると浸水は止まった。エンジンをポンプで汲みあげた冷水で冷却していたのだが、なんとそのノズルが波をたたいた衝撃ではずれ、自分でくみ上げた海水をせっせとエンジンルームに注水していたことがあとで判明した。保安庁の船が救助に来てくれ、ロープで曳航してもらい帰港した（写真 1）。ポンプでくみ上げてみると、エンジンルームにはなんとドラム缶 3 本分の海水が浸水していた。沈みかけていたわけである。救助にあたってはヘリコプターまで出動した。ヘリは一機飛ばすのに数 100 万円かかると聞いていたが、私はこの遭難の 3 日前に船検を受け合格しており、書類の手続きも完璧だったので、救助費用は無料であった。一生分の税金を得た気分であった（写真 2 幸せそうに照れ笑う筆者）。その後筑波に転勤が決定し、船は知人が引き取ってくれた。新潟に帰ったとき彼から釣って来たヒラメをいただいたが、涙がでるほどうまかった。

以上私のパニック経験を紹介したが、次のサプライズに冷静に対処できるか自信はまったくない。

（いとう　さとし／先端応用医学・臨床免疫学）

写真1　海上保安庁の船に曳航される筆者の船

写真2　救助後、幸せそうに照れ笑う筆者